



男は流し台の方からぼたりと水滴が落ちる音を聞いた。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男はぼんやり寝転がっていた。左手で自身の性器を握りながら天井を見上げていた。一人でいるときに性器を握ってしまうのはここ数年の男の癖であった。

六畳の部屋はがらんどろとしていた。それは男の存在をあますところなく暗示していた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計。めぼしい家具はそれぐらいだった。それらめぼしい家具のおかげで一応「生活」という形容は保っている様子であった。

ベージュ色のカーテンは閉め切っていた。日曜日の午前中の日差しがじりじりと部屋全体を圧迫していた。アパートの前の路地では、近所に住む老婆が白毛の犬を連れて毎日の日課である朝の散歩をしていた。

天井を眺めながら、男は自分の思考を眺めていた。

——自分はきっと孤独死するに違いない。

自分は今、人生を棒に振りはじめている。二十五歳で、友達是一人もいない。彼女もいない。自給900円だ。ただ、この国では周回遅れだろうが、何者であろうが、ある意味で自由なのだ。誰も咎めない。自己責任。一度でも競争で脱落した者たちは、ひっそりと孤独死するような流れになっている。

侘しさ。

大抵の人にとってそれは単なる一夜の重圧にしか過ぎない。が、自分の場合は違う。今の自分にとって侘しさは存在のすべてになっている。すべての事象がことごとく侘しさを暗示している。太陽を見ても侘しさを感じ、街の喧騒を見ても侘しさを感じ、テレビを見ても侘びさを感じる。

なぜ、こんなことになってしまったのだろうか？

そんな素直な質問に自分は素直にこう答える。

「ふつうに生きていたらこうなりました」

自分には所謂「ワケアリな過去」などなかった。ただ、あらかじめ用意されていた挫折に白々しく出会ったまでのことだったのだ。群集のざわめきが止むと同時に自分の頭の中のざわめきも止むのと同じように、周囲の同級生たちの笑い声が止むと同時に自分の笑い声もことごとく霧消してしまっただのだ。

結果、現在の自分が残った。

今、自分が恐ろしいと感じている点は、約二点だ。

一つ目は、「ここ数年」という時間感覚が「ここ数年」ずっと続いている、ということだ。「ここ数年」という視野から抜け出せず、現在らしい現在といつも出会い損なっている。いや、違う。過去を振り返るように現在を迎えてしまっている。ここ数年、自分は歳をとることしかして

ない。

二つ目は、この歳になるまで自分の人生を一度も言葉にしたことがない、という点だ。自分で自分の声を知らない。自分の人生はすべて暗示止まりで、本当の人生はまだ始まっていないような気がするのだ。

これが自分にとっての現実なのだ。

そして、これらの問題は他者の介入がなければ絶対に解決しないことも、自分は気づいてしまっている。

日曜日の日はうんと遠くなっていた。

男はそこまで途切れ途切れ思考すると、ぼんやりした。男は自身の性器を握ったままであった。少し絶望しかけていた。

ここ数年、男の思考の展開は決まっていた。現状のこと、将来の孤独死のこと、これを反復していた。

男は次第に時計の音が気になりだした。

男は、自分は今時間とうまくやっていけるのだろうか、と考えだした。ついで、心臓の音が急に気になりだした。先ほどよりも目の先に絶望が蠅のように集っているのを感じた。男は絶望に慣れようと努めた。絶望に慣れようとすることがここ数年の男の日課となっていた。

男は自身の心臓を愛していた。自分の過去にも人生にも大して愛着はなかったが、心臓に限ってはふと可哀相に思える瞬間が多々あったのだ。

心臓が温い。

そして、脈を打っている。

男にしてみれば、これはどんな賭け事よりも賭け事だ、と思うのだ。自分という人間はこんなにも頼りないのに、心臓だけは似ても似つかぬ強靱さをたたえている。

男は今は少し祈りながら性器を握っていた。

戸外から、ドアの乾いた開閉音がした。

その音は男をまどろみから現実へと帰らせた。それはアパートの隣人の帰宅を告げる音であった。この隣人は若い女であった。夜勤らしく、決まって朝方帰宅し、昼間寝ているようであった。男としては以前一度か二度アパートのエントランス付近ですれちがい軽く会釈を交したことがあるばかりの関係に過ぎない。男には知り合っているのに出会っていない人が多かった。

男はその日、一言もしゃべらずに一日を終えた。

翌日、男は自転車に乗って仕事場に向かった。十一月の空は上天気だった。男の住んでいるアパートから仕事場までの所要時間はたったの十分程度であった。仕事場の自転車置き場には、先客として同僚のおばさんがいた。いつも時間的にかち合ってしまうのだった。男の姿を認めたおばさんは、変なものを見るような目で男をちらと見ただけで、去っていった。が、男はそういった扱いにも慣れていたので、さして気にも留めなかった。

男の勤め先は物流会社であった。三年前の四月から働きはじめ、会社自体が休日の火曜日と日曜日以外の五日間出勤していた。人手が足りていない状態なので残業も多かった。総じて一月15万前後の給与である。けれども、男は生活に不自由していなかった。極論を生きている男にとって、衣食住の確保以外に金銭を浪費する必然はなかった。

九時になり、朝礼がはじまった。

専属のバイトも、派遣の連中も、倉庫の隅っこにぞろぞろと集ってきた。おはようございます、の一斉の挨拶の後、場を取り仕切る長野という若き上司が一日の出荷数や注意点などを滔々と述べた。それが終わると、新米の社員である工藤という男が上司風を吹かせたい一心で不要な埋め合わせをした。「定時になると勝手に帰る人がいますが、帰るときは僕にちゃんと報告してから帰るように。以上」

朝礼が終わると、皆それぞれ持ち場へと散っていった。仕事は常温品と冷蔵・冷凍に二分されており、男は後者を任されていた。周囲を柵に囲まれた狭小な場所で、男は背中をかがめながらせっせとピッキングをするのだ。

リストにある商品をピックし、適当な空箱に梱包し、かご車にのせていく。一日、この作業をくりかえす。男はこの仕事が好きであった。こんな歳のとり方は切ない、とは思わなかった。が、こんな歳のとり方は切ないとは思わないのは、少し切ない気はするのであった。しかし、男は自分の人生を言葉にしたことはなかった。

十一時二十分になると昼休みに入る。

皆、事務所の二階にある休憩室でお昼をとるのが日課となっていた。休憩所はあくれた労働者たちのふきだまりといった趣であった。長テーブルが四つあり、それに応じて朱色のパイプ椅子が無愛想に置いてあるだけであった。空調も狂っており、冬なのに冷房がかかっていることも多々あった。

男は一人離れたところに席をとり、事務所の自販機で買ったカップラーメンをすすりはじめた。他の同僚たちは多かれ少なかれ寄り添うようにかたまって食事をとっていた。彼らは自分の家族のことだったり、恋人のことだったりを毎日飽きることなく繰り返し話していた。

男は昼飯をすませると、大抵2ちゃんねるを見ていた。ことにもメンタルヘルス板が特にお気に入りであった。男は携帯をいじりながら、独りにやにやしているときがある。その様子を他の同僚たちに看破され嘲笑の的になっていることを男は知らなかった。

十分前になると、他の同僚たちはぞろぞろと休憩室を退散していった。休憩室の隣にある喫煙室で一服していく手筈なのであった。男はタバコを吸わない。退室の際、一人のひょうきんな同僚

のおじさんが携帯をいじくって笑っている男の肩を叩き、

「なに、どうしたの？ 何にやけてんの？」

とからかった。茶化されるのは慣れていたので、男はただ、「はぁ」とだけ答えておいた。一群が出て行ってしまい、休憩室には男一人だけが取り残された。

男はため息をついた。

突然、れいの新任の上司の工藤がぬっと休憩室に顔を出した。

「おい」きつい口調であった。

「はい」

「なんで、チルドの書類、事務所に持っていかないんだよ」

「すみません、気をつけます」

たいしたミスでなくても、もといミスがなくても、工藤は上司風を吹かせたい一心から重箱の隅をつつくような益体のないケチをつけるのであった。

男は午後もたっぴりと仕事をした。男はこの仕事が変わりと好きであった。こんな歳のとり方は切ない、とは思わなかった。ただし、こんな歳のとり方は切ない、と思わないでいようとする努力は切ない気がするのだった。

男は流し台の方からぼたりと水滴が落ちる音を聞いた。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男はぼんやり寝転がっていた。左手で自身の性器を握りながら天井を見上げていた。一人でいるときに性器を握ってしまうのはここ数年の男の癖であった。

六畳の部屋はがらんどろとしていた。それは男の存在をあますところなく暗示していた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計。めぼしい家具はそれぐらいだった。それらめぼしい家具のおかげで一応「生活」という形容は保っている様子であった。

時刻は八時を少し過ぎていた。

電燈はつけていなかった。部屋はクレヨンで荒く塗りつぶしたかのように翳りつつあった。

男は一日の疲労から、暗鬱でもなく、悲観でもなく、ただ自閉的になっていた。パソコンをほとんど無意識のうちに起動させて、パソコンの液晶画面を見るともなく見つめていた。男はおもむろにズボンを脱ぎ出した。

男は日課として毎日オナニーをする。男は自分の現実においてオナニー以外に何に期待しているのか、思いつかないのだった。今の自分にふさわしいことはオナニーしかない、と確信していた。

事をすませた男は、パソコンの液晶画面を見つつ、コンビニで買ってきた弁当で遅い夕食を済ませた。

男は立て膝で夕飯にがつつきながら、ある計画を立てはじめていた。

——自分は人間に惚れることができない。現実の女に欲情できたためしがない。

しかし、だ。

しかし、世の中には恋というものがあるらしい。

あんな倉庫で働く日陰者のたちにも恋人がいて、家族がいるのだ。彼らは「ワケあり」というステータスを持っており、自分は持っていない。こんなにも味気ない現実の中に恋というものが存在するとはほとんどミステリーですらあるが、これはれっきとした事実なのだ。

では、お前は どうする？

そんな素直な質問に自分は素直にこう答える。

隣の女を呼び出し、なんとか欲情することに成功する。

自分に残された道は今のところこれしかない。

無理難題ではある。だが、不可能ではないだろう。今のところ、彼女に話しかける理由は一つしかない。隣人であり、数回エントランス付近ですれ違ったことがある、という理由だ。しかし、考えてみるともっと根本的な共通点がある。なにせ、自分と隣人の女は他人同士なのだから。つまり、他人同士という共通点があるではないか。

「僕とあなたは他人同士ですね。それじゃあ一緒だ」

男はそれ以上具体的なことは考えなかった。所詮、男にとっては一種の遊戯に過ぎなかったからである。以前すれちがったときに女の顔を一瞥したはずだが、女の顔についてはほとんど何も思い出せないのだった。

結局のところ、男は誰でもよかったのである。

男の住んでいるアパートは四階建てで、一階につき五部屋という構造だった。市街地からやや離れた住宅地が入り組んだ路地にひっそりと建っていた。ひどく簡素な造りで、空き部屋もかなり目立ち、この界限においては最下等のアパートであった。

駅に通じる開けた大通りに出るためには、場末のスナックが立ち並ぶ、日陰者の匂いのする裏路地を通らなければならない。

男は仕事に行くとき、アパート前の自転車置き場からアパートの外観を改めて眺めてみた。男の部屋は二階の一番左の部屋である。女の部屋はその隣だ。男は、ああ、女はあそこに住んでいるのか、と思った。そして、ただ、それだけのことであった。

男は自転車に乗って仕事場に向かった。

九時になり、朝礼がはじまった。

専属のバイトも、派遣の連中も、倉庫の隅っこにぞろぞろと集ってきた。おはようございます、の一斉の挨拶の後、場を取り仕切る長野という若き上司が一日の出荷数や注意点などを滔々と述べた。それが終わると、新米の社員である工藤という男が上司風を吹かせたい一心で不要な埋め合わせをした。「今日も人数がかなり不足しているので人員配置を状況に応じてテキパキ変えようと思っています。指示されたら迅速に動くように。以上」

「それと」長野が思い出したように口を開いた。「今週と来週にかけて契約更新に関する面接をしようと思っています。一人一人、時間を見つけてお呼びしますので、よろしくお願いします」

その指示を受けて、生真面目な数人は頷いた。男は支給された帽子を目深にかぶり、黙っていた。

朝礼が終わると、皆それぞれ持ち場へと散っていった。仕事は常温品と冷蔵・冷凍に二分されており、男は後者を任されていた。周囲を柵に囲まれた狭小な場所で、男は背中をかがめながらせっせとピッキングをするのだ。

リストにある商品をピックし、適当な空箱に梱包し、かご車にのせていく。一日、この作業をくりかえす。男の頭には一つの言葉が繰り返されていた。「他人には他人同士という共通点がある」

十一時二十分になると昼休みに入る。

皆、事務所の二階にある休憩室でお昼をとるのが日課となっていた。休憩所はあらかじめ労働者たちのふきだまりといった趣であった。長テーブルが四つあり、それに応じて朱色のパイプ椅子が無愛想に置いてあるだけであった。空調も狂っており、冬なのに冷房がかかっていることも多々あった。

男は一人離れたところに席をとり、事務所の自販機で買ったカップラーメンをすすりはじめた。他の同僚たちは多かれ少なかれ寄り添うようにかたまって食事をとっていた。彼らは自分の家族のことだったり、恋人のことだったりを毎日飽きることなく繰り返し話していた。

男は昼飯をすませると、大抵2ちゃんねるを見ていた。ことにもメンタルヘルス板が特にお気に入りであった。男は携帯をいじりながら、独りにやにやしているときがある。その様子を他

の同僚たちに看破され嘲笑の的になっていることを男は知らなかった。

十分前になると、他の同僚たちはぞろぞろと休憩室を退散していった。休憩室の隣にある喫煙室で一服していく手筈なのであった。男はタバコを吸わない。退室の際、一人のひょうきんな同僚のおじさんが携帯をいじくって笑っている男の肩を叩き、

「T君はクリスマス、どう過ごすの？ どうせ家でゲームばっかやってんだろ？ がはははは」

とからかった。茶化されるのは慣れていたので、男はただ、「はあ」とだけ答えておいた。一群が出て行ってしまい、休憩室には男一人だけが取り残された。

男はため息をついた。

突然、れいの新任の上司の工藤がぬっと休憩室に顔を出した。

「おい」きつい口調であった。

「はい」

「冷凍品やっているとき、ゴミ散らかすなよ。他の会社の迷惑になるからな」

「すみません、気をつけます」

たいしたミスでなくても、もといミスがなくても、工藤は上司風を吹かせたい一心から重箱の隅をつつくような益体のないケチをつけるのであった。

男は午後もたっぴりと仕事をした。男の頭の中では一つの言葉がぐるぐると巡っていた。

「他人には他人同士という共通点がある」

男は女の後をつけることにした。

その日の仕事はわりと早く終わった。時刻は七時半をまわったところであった。男は仕事から帰宅した際、女の部屋の灯りの有無を確かめた。ついていて、在宅だ、と思い、それを意識しながら自分の部屋に入った。本当に隣に女が住んでいるのだな、と現実の近さを感じた。部屋でじっと息をひそめて、女が外出するのを待った。待ちながら、女の職種について少し考えた。夜勤ということは、夜の店か、工場か、病院だろう。男の頭ではそれぐらいしか想像できなかった。

ややあって、生々しいドアの開閉音を聞いた。

時刻はちょうど八時前であった。女が廊下を歩いていく足音が聞こえた。男もさすがに動悸が高まってきた。

ひとまず女がエントランスを出るまで待つことにした。女の歩調から女がエントランスを出た頃合いを見計らい、男も自室を出た。

外はすっかり暗くなっていた。

アパートのぐるりは、人気もなく、ひっそりしていた。街灯が少ないのがやけに目立った。冬の夜気がおそろしく骨身に染みた。

男は、女を見失ったかどうか、多少の焦りをもって、きょろきょろ辺りを見渡した。男はスナックが連立している裏路地へと向った。夜の店で働いているにせよ、バスなどの移動手段を利用するにせよ、大通りに出る確率が高いだろうと踏んだからであった。

案の定、女はスナックの通りを歩いていた。女の金髪は路地の闇に浮いていた。男は後をつけることをやめ、ひとまず女の様子を見届けることにした。夜の闇に乗じれば、人一人が路地にただ無為に立ち往生していても不審に思われたい自信があったからであった。



スナックの電飾たちはさびれた裏路地の印象を強めていた。男は瞬時、まさか本当にここいら一帯のさびれた飲み屋で働いているのか？ と勘ぐった。男の予感はずれた。女の足は大通りへと抜けていった。

間隔を冷静に測りながら、男も大通りに出た。駅前へと通じる大通りは車の往来が絶え間なく、すでに師走の装いでいそいそとしていた。夜の街は男の好奇心とはあまり溶け合わなかった。男は瞬時、自分を寄る辺のない旅人のように思った。と同時に、夜の街のネオンサインは男に何者でなくてもいい安心感を与えた。

男の視野は十字路の交差点に差しかかった。女は信号待ちで立ち往生していた。男の尾行は無計画なものなのにあっけないくらい滞りなく進んでいた。

男は女の後ろに位置してみた。女は男の存在に気づく気配すらない。どころか、男には気まぐれなポーズを取れるだけの余裕すらあった。

信号が青に変わった。人々は各々動き出した。女は横断歩道を渡ると、コンビニの前を通り、常夜灯のきらびやかな巨大なホテル前を通っていった。男も今は気軽に女の後をつけていった。男はコンビニを日くありげに一瞥した。ついで、ホテル全体を見上げて、ホテルの豪奢さをくまなく感じようと努めた。

男はふと尾行をやめようと思った。

それは偶然の足りなさを感じたからであった。事が大詰めに至らないのだ。男のやっていることはすでに道草になっていた。

男は引き返すことにした。

男はコンビニで週刊誌を二冊ばかり立ち読みして、あんまんを一つ買った。

男はあんまんを頬張りながら、まったく同じ道を引き返していった。せわしない夜の街を後にして、薄暗いスナックの裏路地へと戻っていった。なんのことはない、冬の夜気がいやにきびしく感じただけであった。

部屋に戻った。

六畳の部屋はがらんとしていた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計は、無常さと共に主人の帰りを待っていた。

ベージュ色のカーテンは閉め切っていた。

男は壁にもたれて、おもむろにズボン脱ぎだした。それから瞳を閉じて、女の後ろ姿を思い起こしてみた。めまいを感じた。今日行った尾行の行方を想像してみると、恐ろしいほどの欲情を感じたのである。

いつもより早く事が終わった。

電燈はつけていなかった。部屋はクレヨンで荒く塗りつぶしたかのように翳りつつあった。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男はぼんやり寝転がっていた。左手で自身の性器を握りながら天井を見上げていた。一人でいるときに性器を握ってしまうのはここ数年の男の癖であった。

天井を眺めながら、男は自分の思考を眺めていた。

男はぽつんと、明日も尾行してみよう、と思った。

ただ、よくよく考えてみても、やはり男は女のことを好きではなかった。

それ以来、女をつけ回すのが男の日課となった。

女は大体、八時頃にアパートを出ることがわかってきた。そのため、男はこれまで半ば強制的にこなしていた仕事の残業を母が入院したという嘘の口実でもって軽減してもらい、八時前には帰宅するように心がけた。

男は仕事から帰ると、じっと部屋で待機した。女は案の定決まって八時過ぎにアパートを出ていった。そして、スナックの通りを通過して、大通りに出て、交差点をホテルの方面へ渡って行くのだった。来る日も来る日も同じ道程であった。そして、男も決まってホテル前で尾行を止めるのだった。単純に楽しみは後にとっておきたいという気持ちからであった。その後男はコンビニで週刊誌を立ち読みして、何か食べ物を買って、帰宅するのだった。そして、女とのその後の展開を想像してはオナニーするのであった。

女の職業に関する情報は結局わからずじまいであった。ただし、ほぼ毎日働いていることと、日曜日が休みらしいことがわかってきた。

結局、男と女は知り合っているのに出会ってはいない関係のままであった。

ある平日のことだった。

男がいつものように仕事へ行こうと、部屋であれこれ準備をしていたとき、なぜかしら壁の向こうから複数の人の声がした。時々、笑い声が混っていた。こんなシチュエーションは男にとってはじめてであった。

薄い壁に耳をあてて、その会話を傾聴してみると、もどかしいほどの音量でもって日常会話らしきものが漏れ聴こえてきた。その声の主は二人で、一方はれいの女、もう一方は男の声だということが推測できた。女は「ワケあり」というステータスを持っていたのだ。

男は苛立ちを覚えた。恋人だろうか。だとすれば、なぜ今の今まで連れてこなかったのだろうか。これから外へ行くのだろうか。いや、夜勤で疲労困憊なのにわざわざ外出する手はないだろう。それとも二人一緒に眠るのだろうか。

男はしばらくの間、壁から漏れ聴こえてくる二人の会話を盗み聞きしていたが、ふと仕事のことが頭をよぎった。時刻は八時五十分を過ぎていた。今から職場へ向っても完全に遅刻であった。男は、今日は休もう、と考えた。休む連絡は後であればいい。男は完全に不愉快になっていたのである。

男はドアの乾いた開閉音を聞いた。

ついで、二人が廊下を歩いていく足音を聞いた。

男は二人の後をつけることにした。まず、男は二人がエントランスを出るまで待った。二人の歩調から彼らがエントランスを出た頃合いを見計らい、男も自室を出た。

路上に出ると、前方に二人の後ろ姿を認めた。謎の男は「今時の若者」の紋切り型を地でいく身なりをしていた。傍から見ればあからさまにカップルであった。男は別段、もう嫉妬などしていなかった。ただ、昼間に尾行するのは至極困難であった。単純に人目につく度合いが夜とは比べ

物にならないのだった。

とりあえず男はアパートの玄関口で諸事情ありげに携帯をいじくっていた。携帯を持って笑っているとそれは普通のひとで、携帯を持たずに笑っているとそれは変人なのかもしれない、と男は思った。

二人はれいのスナック通りの方へと向った様子だ。

大通りへ向うつもりなのだろうか。

距離を詰めては、ばれる。少しずつ距離を詰めるしかない。

男は丁度曲り角に位置する住宅の前をうろうろして時間を稼いでいた。

する突然、近所の奥さんらしき中年のおばさんが訝しげな態度で男に話しかけてきた。

「あの」

現実だった。

「失礼ですが、どうして家の周りをうろついているんですか？」

男は動揺した。おばさんにとっては腹を据えた上での行動らしく、見ず知らずの男を前にしても毅然とした態度を保っていた。

男は答えた。

「警察のものです」

なぜ、そんな荒唐無稽な嘘が出たのか、自分でもわからなかった。

「あ、警察の？」

「そうです。今、調査中でして」

「でも」おばさんの形勢も崩れてきた。「制服を着ていないですよね？」

「私服警察です。秘密裏に動いているんです」

男は、さすがに稚拙すぎる、と思った。

しかし、おばさんはおばさんで見かけだけは毅然たるものがあったとしても、不審者らしき人物に話しかけるといふ行為だけでも一杯一杯の決死隊だったらしく、警察手帳のことまでは頭が回らなかった。男は救われた。警察手帳の提示を求められたらまさに一環の終わりであった。

「では、失礼します」

と言って、男はその場を立ち去った。裾をひかれている思いがして、後ろを振り向くと、その角の邸宅の小窓から、そのおばさんの子供と思しき二人の子供が好奇の目でもってこちらを見ていた。男は嫌な気がした。

男は二人を尾行するのを止めた。

ベージュ色のカーテンは閉め切っていた。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男は、悲哀でもなく、暗鬱でもなく、ただ涙を流した。以外にも男の自我はほんの子供でしかないのだった。

「他人には他人という共通点がある」

さすがにその日は何もする気が起きず、その日いっぱい男は部屋に佇んでいた。男は今は祈りながら性器を握っていた。すっかり会社への連絡を忘れていた男の携帯には、いつの間にやら会社からの着信が数件残されていた。

翌日、男は真面目な気持ちで仕事場へ向った。朝礼の際、男は「昨日は無断で休んですみませんでした。少し風邪を引いてしまいました」と真面目に謝罪した。長野は気さくな性格ゆえ「いいよ、いいよ」と笑って許してくれたが、工藤は「休むときはちゃんと事前に言うようにな。すべてに迷惑がかかるからな」と憎まれ口を叩いた。

帰り際、男は長野に呼び出された。以前朝礼時に持ち上がった会社との契約更新についての面接だった。男の順番が来たのだ。

男は事務所の奥まった一室に呼び出された。

そのとき丁度事務所に工藤もいたので、工藤も同席する運びとなった。男は、気まずい、と思った。

長野は、部屋に入る際に豁然と笑い、男に言った。

「なんか、三者面談みたいだな」

長野は「では、席におすわりください」と男に席をすすめ、男は、はい、と言ってしおらしく席についた。

「まあ別にそんな堅苦しい話でもないので、安心してください」と長野は面接の旨を縷々と述べた。一方の工藤は無骨にむっつりと黙っていた。

「まあ」長野は席に座りなおし、「一応わが社と契約されてもう少しで四年が経つということで」

男は、はあ、と言った。

「Tくんはもう毎年やってるからわかっているとは思いますが、一応説明しておく、我が社は一年毎に契約更新してるんですね。それでですね」と言い、一枚の書類を男に提示して、「こちらの契約書の方に変更がないかどうか目を通してもらって、家でサインと印鑑をしてもらってまた持ってきてください」

男は、はい、と言った。先ほどから妙な雰囲気、男は異様なほどかきこまっていた。

ここに至って、工藤が重々しく口を開いた。

「T君にはまだ現在の作業体制が整う前の初期段階から助けてもらいましたので、たいへん感謝しております」

そう言って、あの無愛想な工藤が頭を下げたのである。同時に、横の長野も、感謝しております、と言って頭を下げた。男はますます恐縮の態であった。と同時に、この両者の反応を訝った。おかしい。普段あれほど上司風を吹かし憎まれ口を叩くのにこんな掌を返したようにいきなり敬語扱いするとは。

とかく三人という人数自体がよくなかったのかもしれない。当初は事務的だった面談も、次第にくだけた感じの雰囲気になってきてしまったのである。

長野が言った。

「Tくんって、今何歳だっけ？」

「二十五です」

そう自分で口にしたら、何かが胸に一滴染み込んだ気がした。

「あ、同じ歳か。そうかそうか」長野は軽快に言うのであった。

刻一刻と、胸に何か染み込んでいく。男はいやな予感を嗅いだ。そして、それはそのとおりになるのであった。

「Tくんはさ、これからどうするつもりなの？ 大学卒業してすぐにここに来たわけだから、まだ就職してないわけじゃない？」

男は、何も言えなかった。

なぜそんなことを聞かれなくてはいけないのだろう、と男は思った。先ほどから傷つきはじめていたのが、今決定的に傷ついたのを感じた。男は総身カッと火照っているのを隠そうと必死であった。先ほどの「感謝しております」という感謝の言葉はなんだったのだろうか。君は真面目に我が社に貢献してきた、と親愛感を表白すると思ったら、今度は一転して、おまえは就職していない、とくる。長野は同じ歳だから自分に気を遣ってくれたのだろうか。いや、それならばその一言がどんなに痛手に響くか、知らないはずがないではないか。

結構な間が空いたが、男はまばたきが増えただけで、何も答えられなかった。

「わかんないか」

と、なかば折れた形で長野は微笑しながら言った。

工藤はただ無骨に黙っているだけであった。

「――まあそれは置いといて、何か仕事上の不満とか、対人関係の不満とか、ありますか？ ここはもう少しこうしたらいいのにな、とか」

「ないですね」

「そうですか」

男は傷ついた気持ちを、一言に集約した。

「...あの、そろそろ帰ってもいいですか？」

「そうね」長野はそれに気軽に同意し、「じゃ、終わりにしましょっか？」と工藤に決断を仰いだ。

「そうですね」工藤はそれに気軽に賛同した。

男は荷物をまとめて、おつかれさまでした、と小声で言い、事務所を辞去した。

外はもうすっかり夜だった。傷ついていた。夜気がきびしかった。傷ついていた。バス停に人が数人いるのを認めた。傷ついていた。車がせわしなく往来していた。傷ついていた。自転車に鍵を差し込み、乗り、やけ気味に夜の闇の中を走り出した。傷ついていた。傷ついたとき、どんな表情をすればいいのか、男は知らなかった。

部屋。

時刻は八時をかなり過ぎていた。

電燈はつけていなかった。部屋はクレヨンで荒く塗りつぶしたかのように翳りつつあった。

男は流し台の方からぽたりと水滴が落ちる音を聞いた。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男は体育座りをしながら傷つき続けていた。

先日の不審者扱い。

そして、今日の社員からの一言。

男は一段と絶望が深まったように感じた。

男は壁に耳をあてて、隣の部屋の気配をさぐりあててみた。誰もいなかった。女はすでに仕事

へ行った後らしく、不在だった。ひっそりした夜気がアパート全体を支配していた。

怒り。

男にはどうしようもない怒りが湧いてきた。男は全裸になり、オナニーをはじめた。

性に置き換えてもあまり救いにならない気配をどこかに感じつつも、れいの女の後ろ姿を想像し、高揚の瞬間が到達するのをひたすらに待った。

「他人には他人同士という共通点がある」

六畳の部屋はがらんどろとしていた。それは男の存在をあますところなく暗示していた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計。めぼしい家具はそれぐらいだった。それらめぼしい家具のおかげで一応「生活」という形容は保っている様子であった。

男は流し台の方からぼたりと水滴が落ちる音を聞いた。

事を終えて、男は冷え切った鉄のように落ち着いていた。

つまり、このとき男はようやく隣の女を殺すことを決意したのである。

それ以降、男は会社を無断で休んでいた。もう金輪際行く気がないのであった。れいの契約更新の書類は男のリュックに入ったままであった。携帯の電源も切っていた。

男は数年ぶりに平日の街へ出てみた。

世間。

男は最後にここに来たかったような気がしたのである。

男は今まで世間とはどこのことかわからなかった。

そのくせこれ以上ないぐらい世間を意識して生きてきていた。

今までは、人々が世間世間と口にすることが世間が存在することへの署名なのだ、と思い続けてきたが、今ではよくわからなくなっていた。

確かなのは、こうして街へ出てみるとその世間とやらはたちどころに立ち消えしてしまうということと、自分が世間の片隅にいるという実感だけであった。

木枯らしが吹きすさぶ中、男の前を親子連れの通行人が通っていった。幸福そうに笑っていた。

男はふと、自分がひとを殺したときの動機を考えた。

「なぜ、ひとを殺したんだ？」

「むしゃくしゃしてやりました」

違う、と瞬時に思った。

「なぜ、殺したんだ？」

「誰でもよかったんです」

違う、と再び思った。

「この中で、知り合っている人は何人いますか？」

そう問われれば、きつとこう答えるだろう。

「全員です」

「では、出会っている人は何人いますか？」

そう問われれば、きつとこう答えるだろう。

「一人もいません」

男は知り合っているのに出会っていない人が多かった。

そのとき、動機がはっきりと浮かんできた。

「なぜ、殺したんだ？」

「人が多いからです」

日曜日の日はうんと遠くなっていた。

男は流し台の方からぽたりと水滴が落ちる音を聞いた。

もうずっと引きっぱなしの布団の上で、男はぼんやり寝転がっていた。左手で自身の性器を握りながら天井を見上げていた。一人でいるときに性器を握ってしまうのはここ数年の男の癖であった。



六畳の部屋はがらんどろとしていた。それは男の存在をあますところなく暗示していた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計。めぼしい家具はそれぐらいたった。それらめぼしい家具のおかげで一応「生活」という形容は保っている様子であつた。

ベージュ色のカーテンは閉め切っていた。日曜日の午前中の日差しがじりじりと部屋全体を圧迫していた。アパートの前の路地では、近所に住む老婆が白毛の犬を連れて毎日の日課である朝の散歩をしていた。

男はむくりと起き上がり、戸外へ出て、隣の部屋の扉の前に立った。

男は結果として、自身の人生をあえて掴み損ねることを望んだのであつた。

インターホンを押した。一瞬、どきついほどの緊張を味わつた。

間があつた。この間は現実そのものであつた。

「はい、どちらさまですか？」

扉の向こう側から女の声がした。

「あの、隣の者ですが、ちょっと相談がありまして」

がちゃと開閉音した。

扉が開いた。

その一瞬で、男は、女の顔と、金髪 of 髪 of 毛と、ふくよかな体の線がそれとわかる白い服などを見た。と同時に、それらをかき消すかのように、女を殴っていた。

どたん！ と不気味なほど乾いた大きい音を立てて、女は前方へうつ伏せに倒れた。体が廊下にはみ出してしまった。アパート内は森閑としていた。男は、倒れた、倒れた、と思った。

女は気を失っていた。

見たところ出血はなかつた。それは男を安心させた。が、まだ死んでいない分、不安でもあつた。男は女を自室に連れ込もうとした。ずるずると両手を引きずる形で、自室へと連れ込んだ。

部屋。

もうずっと引きっぱなしの布団の上に、女を仰向けに寝かせた。男は女体を見た。まず、顔をじっと凝視してみた。可もなく不可もない、平凡な顔だつた。男にとっては好きな顔とは思われなかつた。それから、息を飲んで女の姿態を注視してみた。

見ても見ても、男に情欲が湧くことはなかつた。すべては語るに落ちていたのだつた。明らかに何か足りないのだ。それは偶然であつた。

男は、なんと貧しい邂逅だろう、と思った。

女体がある。それだけでいつもと明らかに部屋の様子が違つた。プライベートな空間に社会性が強制的に挿入されてしまつていたのだ。むしろ男は自分の方が強姦されている気さえした。

それでも男はずぼんを脱ぎ、自身の股間をまさぐってみた。男の性器はまったく反応しなかつた。

白い服の上の胸のふくらみを見た。おそろおそろ触ってみた。そのやわらかさは男の予想を多少は超えてくれたので、少し助かつた思いであつた。興奮した。ついで、キスを試みようか

と思った。が、心と女の意識が戻ったときのこと頭をよぎった。女に大声で怒鳴られたら、と思うと恐ろしくなり、キスするのははばかりされた。

それ以上、男は女に触れなかった。

男は徐々に発狂の気配に襲われるのを感じた。

発狂した方が圧倒的に楽であったのに、男はぎりぎりのところでその衝動を抑え込んでしまった。その代理としてだろうか、うう、という異様な呻き声と共に、

「違う」

という言葉が口からついて出た。

男は空耳を聞いた気がした。忘れていた自身の肉声を聞いた気がしたのである。それはなんだか他愛ない少年みたいな声だった。それが哀しかった。と同時に、何かが始まった、と思った。自分の言葉を声にしてみたら、一つ、何かが始まった気がしたのだ。男は、自分の言葉を口にするのがなぜこんなにも他人より遅れてしまったのだろうか、とにぶくにぶく感じた。

男は瞬時、隙間風を感じた。

泣き出したのだ。後悔の涙ではなかった。子供として泣いたのでもなかった。結果として、うんと日が遠くなってしまったから、泣いたのだった。

それから男は無性に殴りたい衝動を感じた。座卓の上にあったノートパソコンを閉じた状態で掴み、その角を立てて、寝ている女の頭を殴った。殴って、殴って、殴った。男は目の前で大量の血が溢れ出てくるのをただじっと見ていた。

男はパンツを脱ぎ捨て、オナニーをしだした。それは性的興奮によるものではなかった。行くところまで行くのだ、とにかく突き抜けなければ、という虚しい衝動によるものであった。

時間が刻一刻と経っていくのを身を感じながら、男は自身のモノをしごき続けた。日曜日の日差しが部屋全体を彩っていた。男は異常なまでに時間に監視されているのを意識した。こんなにも切迫した時間感覚を経験したことは今までになかった。

高揚の瞬間が訪れた。

女体の横の床に、ぼたぼたと精液がこぼれ落ちた。

世の中には恋というものがあるらしい。

男には知り合っているのに出会っていない人が多かった。

男は流し台の方からぼたりと水滴が落ちる音を聞いた。

六畳の部屋はがらんどろとしていた。それは男の存在をあますところなく暗示していた。ブラウン管式のテレビ、小さな座卓、その上にあるノートパソコンと安物の置時計、めぼしい家具はそれぐらいだった。それらめぼしい家具のお陰で、一応の生活という形容は保っている様子であった。

もうずっと引きっぱなしの布団の上には、女の遺体があった。

男はその横で体育座りをしていた。男は、やっと外に出れる、やっと外に出られる、と頭の中で繰り返し呟いていた。それから、獄中生活のことを思った。それを思うと、やっと自由になれた気がして、とわくわくしてきた。

男はややあって、女の遺体を部屋に残し、まったくの手ぶらのままアパートを後にし、ふらふらと近くの交番に自首した。

男は逮捕された。

男の事件は全国規模で大々的にニュースに取り上げられた。メディア側のバイアスのかかった報道は相変わらずであった。

同じアパートの住人はメディアの取材に対し、

「いや、顔を合わせても挨拶もしない感じで」

と朴訥に答えていた。

男の職場の同僚たちもメディアの取材に対し、

「仕事はちゃんとしていましたね」

と一応は中立的な意見を述べるも、「ただし、一方ではこんな意見も」という恣意的なナレーションを挟んだ後に、

「ただ、いつも一人でいて、友達はいない感じでしたね」

と異常な犯罪にはお決まりの犯人像を導き出すようなコメントを忘れなかった。

ある報道番組の司会者はこれ以上ないぐらいの渋面で次のように語り出した。

「本当に考えられない事件ですね。私には理解できません」

同席していたあるコメンテーターは、

「やっぱり社会的格差が今回のような事件を生み出した要因だとすると、もっと彼らのような社会的弱者に手をさしのべるような社会的な制度を早急に用意しなければならないと思います」

と付言した。

男は警察の取調べに対して一切言い訳らしき事を語らなかった。当惑の様子はなく、むしろきびきびとした調子で事実だけを述べていた。それは、ようやく狭小な六畳の監獄から脱出でき、公共性という新鮮な空気を吸えたのが心地よかったからであった。

結局、メディアは事件の残忍さと不可解さを誇張して喧伝しただけで、男の動機について深く追求することはなかった。男の真の動機を誰も理解しないまま、この事件は一週間も経たないうちに世間から立ち消えしてしまった。

ただ一つわかっていることは、男には彼女がいないということであった。